

---

# バカとテストと監視者

米田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと監視者

### 【Nコード】

N4694T

### 【作者名】

米田

### 【あらすじ】

木下姉弟には、川上蓮、絵美里の双子の幼なじみがいた。だが、三年前、親の仕事の都合でアメリカに引っ越してしまった。それから三年後、アメリカから帰ってきた川上兄妹は文月学園に編入し幼なじみの秀吉や、吉井明久、坂本雄二とのドタバタ青春ストーリー。

## プロローグ？優子の夢（前書き）

どうも、作者の米田です。初めての投稿です。  
誤字脱字があるかもしれませんがよろしくお願ひします。

## プロローグ？優子の夢

プロローグ？

木下優子 Side

・・・三年前とある公園にて

アタシは隣に座っている幼なじみの蓮に話しかけた。  
。

『・・・ねえ、本当にアメリカに行くの？』

蓮の答えは前と変わらなかった。

『ああ、行ってくる』

アタシは少し寂しくなった

『・・・そう』

『寂しいか？』

『・・・っ！！そんなわけない』

アタシは心の中を見破られて、少し慌ててしまった。

『・・・大丈夫だって三年たったら戻ってくるから』

『なんで、三年後？』

アタシは気になり、聞いてみた。

『いや何となく、三年ぐらいしたら戻れるかなって思って・・・』

期待して損した。

『バカじゃないの？何となくじゃあ戻ってこないかもしれないじゃない』

もしかしたらもう会えないかもしれない。

『いや、絶対戻ってくる。何が何でも戻ってくる。そして戻ってきたら、真っ先にお前に会いに来る』

アタシは信じられなかった。だけど、信じてみようと思った。

『ホントに・・・バカじゃない・・・』

『まあ、俺だけ戻ってくる訳にはいかないが・・・』

『えっ、なんで？』

『いや、親は仕事で残るだろうけど・・・、絵美里がわたしも行くって言うだろう・・・』

・・・確かに、あの子なら言いそうね・・・

『まあ、絵美里は俺がだめって言っても、ついてくると思う・・・』

アタシは何となく、理由が分かっているけど念のため聞いてみよう。

『何か理由があるの?』

『・・・秀吉が戻ってきたら絵美里と付き合う約束したから・・・、たぶん戻ってくる』

・・・アイツはなんて無茶な約束したんだろう・・・

蓮は腕時計を見て時間を確認していた。

『もうそろそろ時間だから行く・・・。じゃあな』

蓮はアタシに背を向けて行こうしてる。

待って!!行かないで!!アタシ、まだ、言いたいことがあるの!!

『蓮!!』

「・・・上、・・・姉上・・・、姉上!!」

「・・・ううん?」

アタシは秀吉の声で目が覚めた。

「姉上、朝じゃぞ」

「わかってるわよ・・・夢だったのね・・・」



## プロローグ？秀吉の夢

プロローグ？

秀吉 Side

三年前幼なじみの家の前にて

ワシは幼なじみの絵美里と話しておった。

『うつ、ぐす……』

普段は明るく、天真爛漫の言葉がピッタリな絵美里が泣いておった。

なぜ泣いておるのかと言うと、親の仕事の都合で遠く離れたアメリカに引越す事になったからじゃ。

『絵美里、泣くではない。泣くと折角のかわいい顔が台無しじゃ……』

『でも……、だって、ヒクッ、秀吉君と会えなくなるなんて……いやなんだもん。もっと秀吉君と話したいことがあるし……』

……ワシだって、絵美里や蓮と会えなくなるのはいやじゃ……

『ねえ、秀吉君……』

『なんじゃ？絵美里』

『ワタシ、秀吉君のことが好き・・・』

『っ!!! 絵美里、何故じゃ!?! 何故今、ワシに告白する!?!』

何もこんな時に告白せんでも・・・

『・・・会えなくなる前に、ワタシの気持ち伝えたかったから・・・  
もう会えなくなるかもしれないし・・・』

・・・絵美里がそんな事を考えていたとは知らなかった。

『秀吉君、答えを聞きたいんだけど・・・もしだめなら、だめって  
言ってくれていいから。秀吉君の答えを聞かせて・・・』

・・・絵美里は今答えを聞きたいようじゃがいきなり告白されて、  
心の整理が着いておらぬ・・・

『絵美里、正直言つと心の整理ができておらぬ・・・、だから、今  
は答えてられぬ・・・、じゃがもしお主が戻ってきたら、お主付き  
合えるかもしれん。じゃから少し待ってくれぬか?』

『じゃあ、戻ってきたら付き合ってくれるって、約束してくれる?』

『約束じゃ』

『分かった・・・その代わり・・・』

『その代わり?』

『・・・戻ってきたら、秀吉君のファーストキスを頂戴』

『・・・わ、分かったのじゃ』

絵美里が顔を赤めておるが、ワシも顔を赤らめた。

『そつえば、姉上と蓮は何処におるのじゃ?』

『優子ちゃんと蓮兄は近くの公園で2人で話してるよ』

・・・姉上も同じような事を話しておるのかの?

『じゃあ、秀吉君、行ってきます』

絵美里は目に涙を浮かべながら車に乗った。

『いってらっしゃい、じゃ、絵美里』

・・・ピピ!!・・・ピピ!!・・・ピピ!!・・・ピピ!!・・・ピッ。

「うん?・・・なんじゃ夢だったか・・・」

・・・久しぶりに絵美里の夢を見たのお、何か約束したような気がするが何じゃったかのお。

「さてと、姉上を起こすとするかのお」



## 第一話 再会？

木下優子 side

アタシは部屋から出てリビングに降りてきた。でも、両親はいなかった。

「あれ、お父さんとお母さんは？」

「父上と母上は仕事行ったぞい」

「ふうん、忙しそうね」

「姉上・・・身内なのにまるで他人事の用に、言うのはやめるのじや・・・」

・・・それもそうね。

「・・・とりあえず、ご飯を食べないとね・・・」

アタシはお母さんが作っておいたご飯を食べながら、ふと今日見た夢を思い出した。

「はあ、もうあれから三年経つんだ・・・」

「どうしたのじゃ？姉上、ため息ナゾ吐いて」

「別に・・・蓮と絵美里がアメリカに行ってから、三年経つんだと思ってる・・・」

「そういえば、そうじゃな……。たしか三年したら戻ってくると言ってたのう……」

「……本当に三年経つのは早い、蓮は戻ってくるって言っていたけど……、ホントに戻ってくるのかな？」

「……もしかして、姉上は不安なのかな？」

「いや、別にそんな訳じゃないけど……」

「……本当になんで嘘を見抜くのがうまいわね……。演劇バカだからかしら？」

「そういえば、姉上ワシは絵美里と何か約束したと思うのじゃが……覚えておるかの？」

「……約束した本人が覚えていないってどういふ事よ……」

「覚えてるけど……自分で思い出しなさい……」

「そんな……」

「それじゃあ、アタシ、そろそろ行くわ……」

「普段より早いのうち……どうしたのじゃ？」

「べ、別に何でもないわよ……。ただ行く前にあの公園に行こうと思っ……」

・・・少しだけだけど、蓮が戻ってくるかもしれないって期待してるから・・・

「期待してるのかの姉上・・・そりゃあ、蓮は姉上の初恋の・・・あ、姉上その間節はそっちに、まがらな・・・!!」

恥ずかしい事を言うからいけないのよ・・・

「・・・回復したら早く行きなさいよ・・・」

そしてアタシは、家を出た。公園は学校に行く途中にあるから、遅刻しないと思う。

公園に着いたけど、やはり蓮は居なかった・・・

「やっぱり、居ないよね・・・期待したアタシがバカだったのかな？」

目に涙を浮かべながら、学校に行こうとしたけど・・・

ドン!!

誰かにぶつかり尻餅を着いた。

「きゃッ!」

「あつご、ごめん、ちょっと考え事してて・・・?・・・優子?」

どうやら、ぶつかった人は男のようだ。自分の名前が呼ばれたので顔を上げると・・・

「嘘……」

目の前には金色の髪、黒い目の自分の知ってる人がいた……

「蓮……」

今、逢いたいと思っていた幼なじみの蓮だった。

## 登場人物紹介

### 登場人物紹介

名前 川上 蓮（かわかみ れん）

身長 175? 体重 57?

### 身体の特徴

母親方の祖父が外国人の血を引くので、髪の毛が金髪。目は何故か黒色。

家族構成 父、母、双子の妹の絵美里、祖母の藤堂力オ儿。

本作の主人公。

木下姉弟とは幼なじみで、家も近い。三年間、アメリカに行っていたが、優子との約束を守るため絵美里と二人で戻ってきた。

小さい頃、髪が金色ということで虐められていたが、優子に助けられた。そして優子の事が好きになった。趣味は試験召喚獣の試運転。特技は料理。成績はAクラスレベル

召喚獣の装備は大剣と鎧、腕輪の能力・・・未定・・・

川上 絵美里（かわかみ えみり）

身長 154? 体重 シークレット

身体の特徴

蓮と同じく、金髪、黒目 胸は霧島レベル。

蓮とは双子で、天真爛漫。秀吉の事が好きで、本人曰く秀吉の笑顔が素敵らしい……

召喚獣の装備。ダイナマイト……。腕輪の能力、相手の召喚獣の動きを止める『金縛り』。

用語解説

監視者……。問題のあるクラスを監視するための肩書き。蓮と絵美里が学園長にFクラスを見張るために、任命したが、本人たちは監視しようとは思っても居ない。

時期……。3・5のグランドパーク編の後

## 第二話再会？

蓮Side

「・・・久しぶりだな、この町に来るのも・・・」

俺、川上蓮は、三年ぶりにこの町に戻ってきた・・・親の仕事の都合でアメリカに行っていた。

・・・だけど、俺は幼なじみとの約束を守るために、双子の妹の絵美里と共に戻ってきたのだ・・・

「優子・・・」

俺は幼なじみで、初恋の人である女の子の名前をつぶやいた。

俺はまず、優子の家に電話をしたが出なかった・・・携帯の番号は知らないから連絡できないし・・・

取りあえず家を訪ねようと思い、家を出た。・・・出るとき、絵美里に『ちゃんと告白するのよ』と言わ

れたが、無視しよう・・・。

でも、家には誰もいなかった・・・。

ダメ元で、最後に優子と会った公園に行こう。・・・会えなかったら学校で会えばいいんだし・・・

そんな事を考えながら、歩いているとあの公園が見えてきた。

懐かしい・・・何も変わっていない・・・

そして誰かとぶつかった・・・

「あ、ご、ごめん。ちょっと考え事してて・・・」

ぶつかった人を見てみると、俺の知っている幼なじみだった・・・

「・・・優子？」

「嘘・・・」

優子はまるで、信じられないものを見ているようだった・・・

「蓮・・・」

優子Side

アタシは目の前にいるのが蓮だと、信じられなかった・・・

「蓮？蓮なの？」

「ああ、俺は蓮だ・・・」

「どうして・・・？アメリカに行っていたんじゃないの？」

アタシは、なぜ蓮がこの町にいるのか気になった。



「なら、携帯に・・・」

「お前の携帯番号、知らないんだけど・・・」

たしかに・・・教えてなかった・・・。

「でも、アタシずっと、蓮に・・・会いたかったんだから・・・」

アタシは蓮の胸に顔を埋めて、泣いていた・・・

「まあ、会えたんだし、結果オーライだな・・・」

「ねえ、蓮・・・」

「ん？なんだ？」

「もう、何処にも行かないで・・・」

折角会えたのにまた、会えなくなるのは嫌だから・・・

「ああ、ずっとお前のそばにいてやる」

そして、アタシは蓮の手と自分の手を繋いだ。

第二話再会？（後書き）

どうも、作者の米田です。

感想をお待ちしています・・・

### 第三話 Fクラス？

優子Side

アタシはふと、気になった事があった。

「ねえ、蓮そういえば、その制服・・・」

アタシは蓮が着てる服を指さした。

「ああ、これか、文月学園の制服だけど・・・」

・・・やっぱり・・・

「蓮も、文月学園なんだ・・・」

「ああ、そっだよ。優子たちがいることも知ってたから・・・」

「なんで、知ってるの？」

「いや、あの人から秀吉がFクラスにいるって聞いて・・・」

・・・あの人って誰だろう・・・

「じゃあ、どのクラスに入るの？」

・・・たぶん、BかCクラスだと思うけど・・・

「ああ、Fクラスだけど・・・」

「ええ!!」

えっ、何で？そんなに頭悪かったっけ、蓮・・・

「いや、ちょっと、やることがあるんだよ。Fクラスで」

「そ、そうなんだ・・・」

何だ、良かった・・・

「そういえば、絵美里は？戻ってきたんでしょ？」

すると、蓮は不適に笑った。

「ああ、あいつも文月学園にはいるし、Fクラスだ。」

「へえ、そうなんだ。・・・なんか大変な事になりそうだね・・・」

「ああ、そうだな」

・・・何か楽しそうね・・・

「そろそろ行くっぜ・・・、行かないと遅刻するぜ」

「う、うん・・・」

アタシは、蓮と手を繋ぎ、学校に行った。

そんな中、蓮はアタシに話しかけた。

「あ、あのさあ、優子今週の土日どっちか、開いてるか？」

「えっ！？暇だけど、どうしたの？」

もしかして、デートに誘ってくれてるの？

「いや、あの、その・・・そう三年間で町も変わったろ？だから、案内でもしてもらおうかなっ

て・・・」

顔を赤くして言い訳する蓮は、かわいかった。

「じゃあ、俺こっちだから。また、放課後会おう！！」

そっぴい蓮はFクラスの下駄箱に向かい、走る。

明久Side

「ああ、本当に卓袱台っていいね・・・」

僕は、鞆を置いてる卓袱台を見ながら独り言を言った。なぜかと言つと最近まで、机がミカン箱だったからね・・・

「うん？明久、今日は早いのう」

「あ、おはよう秀吉」

僕の目の前には、美少女（？）の秀吉がいた。

「・・・今、美少女と思うたじゃろ？」

「い、いや思っ  
てないけど・・・」

相変わらず鋭いね・・・

「うーす、お前等なにやってんだ？」

「おはようございます。明久君、木下君」

「おはよう、アキ、木下」

「・・・おはよう」

「おはよう、雄二、姫路さん、美波、ムッツリーニ」

僕は、目の前にいる悪友の雄二とこのクラスの紅一点の姫路さん、  
全身凶器の美波。我らのムッツリーニ。

「そっ  
えば、妙なことがあるのお」

「ど  
うしたの？秀吉？」

「いや、何故だか卓袱台が二つ多いのじゃ・・・」

「えっ！？」

言われてみて数えると、二つ多い。

「ホントだ・・・何故？」

「おい、席に着け！！HR始めるぞ！！」

「げっ！！鉄人！！」

「鉄人と言っな！！」

体育系の先生、鉄人こと西村先生が現れた。

「先生！！なんで卓袱台が多いんですか？」

僕は気になること聞いた。

「ああ、転校生が来るからな」

驚きの事実。

『先生！！女子ですか』

誰だそんな事聞してるの・・・

「ああ、女子もいるぞ」

「「「「「おおおおおおっっっ！！！！！！！！！！」」」」」

野郎どもの叫びが響いていた。

「男子もいるぞ・・・」



**第三話 Fクラス？（後書き）**

どうも、作者の米田です。

次話で大変な事が起こります。

#### 第四話Fクラス？（前書き）

はい、今回色んな意味で大変な事が起こります・・・

## 第四話Fクラス？

蓮Side

「絵美里、準備はいいか？」

「うん、色々と」

・・・ある意味心配だな・・・

「じゃあ、行こう」

そして、俺達はFクラスに入ってしまった。

秀吉Side

ワシは転校生の顔を見て驚いた。何故なら・・・

「絵美里！！蓮！！」

三年前にアメリカに行った幼なじみじゃったから。

「ヤッホー秀吉君」

「ういつす、久しぶりだな、秀吉」

「何故じゃ？お主等は、アメリカに行ったはずじゃが。何故日本におるのじゃ？」

「・・・色々あつてな・・・」

・・・何故か蓮が、少し遠い方を見ているのは、気のせいなのじやろうか？

「おい、そろそろ自己紹介を始める」

「あつ、はい。俺の名は、川上蓮だ。蓮と呼んでくれ、趣味は、読書だ。これからよろしく願います」

まず、蓮が自己紹介をした。

「じゃあ、次はワタシだね。ワタシ蓮兄の双子の妹で、川上絵美里です。エミリーって呼んでください」

「「「「エミリー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」」

凄い人気じゃのう。

「ちなみに、私たちは、秀吉君と優子ちゃんとは幼なじみです」

シュツ!!<カッターを蓮に向かって投げる音>

サツ!!<蓮がよける音>

「「「「ちつ・・・」」」」

Fクラスの男子（ワシ、雄二、明久を除く）男子の舌打ちが聞こえた。

「お前等、川上兄妹に聞きたい事があるなら、聞いておけ」

「はい、質問です」

西村先生が話すと、すぐに須川が質問をした。

「その髪は、染めましたか？」

「「地毛です!!!」」

絵美里と蓮の声が重なった。まあ、無理も無いじゃろう。二人は金髪じゃからの・・・

「母方の祖父が外人の血を受け継いでいるから、金髪なんだ。ちなみに最近までアメリカに行っていました」

「へへ帰国子女なんだ」

「自己紹介も終わったことだし、席に着け!!!川上兄は坂本の隣、川上妹は木下の隣な」

すると蓮は、雄二の隣に、絵美里はワシの隣に座った。

「秀吉君、よろしくね」

「よろしくじゃ、絵美里」

・・・久しぶりに会うが、可愛いのお。

「そっいえば、秀吉君」

「何じゃ、絵美里？」

「・・・約束覚えてる？・・・」

「約束？はて？何じゃったかの？」

「・・・覚えてないの？」

「・・・すまん、覚えてないのじゃ・・・」

「えっと、あの、あれじゃろその・・・」

「覚えてないならいいよ・・・別に」

「ちょっと絵美里は拗ねた顔をしたが何故じゃ？」

「それより、秀吉君、顔にごみ付いてるよ」

「絵美里がワシの顔を指さした。さわってみるが、ゴミは取れなかった。」

「もう、そこじゃないよ。ワタシが取ってあげるから・・・」

「絵美里がワシに顔を近づけて、そして・・・」

「・・・ん・・・」

「「「えっ？？・・・」」」

ワシの唇が絵美里の唇と触れ合い、キスをした・・・

第四話Fクラス？（後書き）

・・・まさかの秀吉と絵美里のキスシーン。

次話にも続きます。

## 第五話Fクラス？

秀吉Side

・・・ワシは、一瞬思考が止まった・・・。何故なら、絵美里がワシと、そのキスをしたのじゃ・・・

「んっ・・・」

「っ!!!」

更に舌まで入れようとした。ワシは抵抗したのじゃが・・・舌を入れた深いキスをされたのじゃ・・・

「ん、ひゃああああ」

ワシは顔を赤くし、体の力が抜けそうになった。

『っ!!!!!!(ブシャアアアアアア!!!!!!)』

『誰か!!!ムツツリーニが出血多量で死にそうだ!!!輸血しないと!!!』

近くでムツツリーニが大量の鼻血で赤い水溜まりを作っていた・・・

「ん・・・、これぐらいかな」

「な、何をするのじゃ!!!絵美里!!!い、行き成りキスをして・・・

「

「だって、秀吉君が約束覚えてないのが、いけないんじゃない」

「約束？ワシはどんな約束をしたのじゃ？」

「ほんとに覚えてないんだ・・・、じゃあ思い出させてあげる」

そして、絵美里はポケットから、ボイスレコードを取り出した。

「カチッ！！（再生ボタンを押す音）」

『じゃあ、戻ってきたら付き合ってくれて、約束してくれる？』

「これは絵美里の声じゃの」

『約束じゃ』

「これは、ワシの声じゃの・・・」

『分かった・・・その代わり・・・』

『その代わり？』

『・・・戻ってきたら、秀吉君のファーストキスを頂戴』

『・・・わ、分かったのじゃ』

カチ（停止ボタンを押す音）

「」「」……「」「」

「思い出した？」

「思い出したのじゃ……」

……ワシはそんな約束をしたのか。

「じゃあ、約束通りワタシと付き合ってね」

「……わかったのじゃ」

……こうしてワシは絵美里と付き合うことになったのじゃ。

でもワシでいいのかな？

「じゃあ、デートに行こうよ」

ワシの腕を掴み、連れて行こうとする。

「待つんじゃない！！まだ授業が始まったばかりじゃぞ……！」

……大変な事になりそうじゃ……

## 第五話 F クラス？（後書き）

次回、川上兄妹の正体（？）が分かります。

## 第六話正体

秀吉 side

「はあ……」

……ワシは普段付かない、ため息を付いた。何故かというところ……隣にいるの絵美里が原因じゃ……

行き成りキスをされて、困ったからじゃ……

「どうした秀吉？」

……蓮がニヤニヤした顔で心配してきた。

「蓮は知っておったのか？」

「まあな」

「まあなって……」

「仕方ねえだろ？ 忘れたお前が悪いんだろ」

「それはそうじゃが……」

……全く蓮も蓮じゃな……

「大変だったね、秀吉……」



鎌をぶん回す、異端審問会に対して、蓮は・・・

「あれをやるか・・・アウェイクン起動!!」

明久Side

「アウェイクン起動!!」

僕は蓮が唱えた呼び声に驚いた・・・

「雄二、これって・・・」

「ああ、これは俺の白金の腕輪の・・・」

何で？蓮が雄二しか持ってない、召喚フィールド作成の腕輪を持っているんだ？

「そして、サモン試獣召喚!!」

そして、また呼び声で召喚獣を呼び出して・・・、って呼び出して  
も意味が無いけど・・・僕の召喚獣以

外、物に触れられないんだけど・・・

そして、現れたのは蓮をデフォルメした召喚獣だ。装備は・・・鎧  
に大剣？

「召喚獣を呼んだところで、何も・・・ぎゃあああああ」「」

蓮の召喚獣が、鎌をぶった切り、異端審問会のメンバーを殴り飛ば



霧島さんより点数高いつてどういう事？

「戦死者は補習！！！！！」

「！！！！鉄人！？！！！！」

我がクラスの担任、教育の鬼、鉄人現る・・・

「！！！！嫌だ！！補習室は嫌だ！！！！！！！！！！」

そして、須川君達は補習室へ連れて行かれた・・・

残ったのは僕たちだけだ・・・

「おい、蓮お前はいつたい何者だ！？」

雄二が聞くのは当たり前だ・・・

「ああ、俺か、俺達は監視者だ」

「はい？・・・」

蓮 Side

は、ははっはは、惚けてるよ・・・

まあ、行き成り監視者って言われてもピンと来ないだろう・・・

「俺と絵美里は、お前達Fクラスを監視するのが目的なんだ」

「えっと、監視って？」

明久が聞いてきたが、まあ普通は監視する必要がないのだけど・・・

「・・・お前等は、文月学園開校初の、観察処分者とA級戦犯だし・・・」

あとは・・・

「それに学園を破壊したからな・・・」

学園祭のあの事件が決定的だろ・・・

「確かに監視されて当然だけど・・・」

明久が不安そうな顔してるな・・・

「って言うのは建前だ」

『はあ？』

うん、みんなあきれてる。

「俺達は日本に戻ってくる理由が欲しかっただけで、監視する気はさらさらない」

「へ、へえ、そうなんだ・・・」

・・・よかったみんなほっとしてる・・・

「で、なんで白金の腕輪を持つてるんだ？」

うん？坂本が聞いてきた。

「ああ、祖母さんからもらったんだ」

「祖母さん？」

「ああ、俺の祖母さん・・・学園長だ」

「「「えええっ！！」「」」

そんなに驚く？

「・・・全然似てない・・・」

「まあな、ちなみに母方の祖母さんだ」

「だから色々実験に付き合わされるのよねえ」

あつ、絵美里も参加してきた。

「実験？」

「ああ、白金の腕輪や召喚獣の腕輪の能力を色々試したりしてな、使える腕輪は採用するんだ」

「へえ」

「あつ、そうじゃ。蓮、お主達はアメリカで何をしていたのじゃ？」

秀吉がアメリカでの事を聞いてきた。そういえば、本当のこと言っ  
てなかったな・・・

「アメリカでは、文月学園アメリカ校で実験してた」

『文月学園アメリカ校？』

・・・まあ知らないだろうな・・・

「祖母さんが外国にも作るうと言ったことで、海外初の文月学園を三  
年前にアメリカで完成させたんだ」

「知らなかったなあ」

「ちなみに俺と絵美里はAクラスの代表と学年次席だ」

「えっ？じゃあ、川上さんも点数高いの？」

「うん、蓮兄には適わないけど」

・・・でも総合科目、6000点いつてるけど・・・

「吉井君、坂本君、ムッツリー二君、秀吉君、美波と瑞希。これが  
らよろしくね」

・・・もう名前で呼び合っているんだ・・・

**第七話俺と尋問とAクラス（前書き）**

今回は、Aクラスの三人が出てきます。

## 第七話俺と専問とAクラス

蓮Side

「なあ、秀吉……」

「何じゃ？蓮？」

俺は、気になっていることを周りに聞こえないように、小声で秀吉に聞いた。

「今、優子に彼氏はいるか？」

「……蓮、まだ姉上のこと……」

「ぐっ……そうだよ。優子のが好きだよ」

「……やっぱり気づいてたか。」

「安心するのじゃ、姉上は誰とも付き合っていない」

「そっか、よかった……」

正直言つと、安心した……

「へえ、蓮って木下さんのこと好きなんだ……」

「あ、明久！？何時の間に？」

「今って言った頃からだよ」

・・・そんな時から聞いてたのか・・・

「なるほどねえ、川上は木下さんが初恋の人なの？」

「もしかして、ずっと片思いなんですか？」

「し、島田に姫路、お前達も聞いてたのか!？」

小声で言った意味が無いじゃんか!!

「安心して、雄二とムツツリー二には聞こえてないから」

「そ、そうかなら良かった」

「あと、異端審問会には言わないから」

「それは助かる!！」

あいつらに知られたら大変な事になるからな・・・

「と・こ・ろ・で、さっきの質問の答えは？」

・ 島田がしつこく聞いてきた。・・・女子ってこういう話好きだな・・・

そんな時、タイミング良く先生が来た。

「じゅ、授業が始まるから、また後で」

・・・危なかった。

そして、昼休みまで逃げ切った・・・

「はあ、腹減った・・・」

俺は鞆から俺の弁当と、絵美里の弁当を出した。

「蓮兄早く、早く」

「はいはい、どうぞ」

「？蓮が料理してるの？」

「まあな、絵美里もできるけど今日は俺が当番なんだ」

「当番？」

「ああ、毎日料理していると、味が飽きるから・・・」

「そうなんだ・・・。蓮は作って覚えたの？」

「まあな、母さんも父さんも仕事で忙しかったから・・・俺と絵美里が家事してるんだ。ちなみに、絵美

里は花嫁修業と言うことで練習してたぞ」

・・・秀吉の顔が青くなっていたの気にしないでおう・・・

『・・・優子入らないの』

『だ、代表、アタシはただ秀吉がバカな事してないか見張りに来ただけで・・・』

『嘘でしょ、優子はそんな理由でFクラスに来ないよ。何か別の理由があるでしょう』

『べ、別に他に理由は無いわよ』

『・・・取りあえず入る』

?なんか優子の声が聞こえたけど・・・

ガラガラ（ドアが開く音）

そして、三人の女子が入ってきた。

「優子？」

そこには、俺の幼なじみの優子がいた。

「れ、蓮・・・」

「ふっん優子の目的って、この人なんだ」

優子と俺の事を見てにやけているミドリ色の髪の子がいた。確か・  
・

「確か、工藤愛子さん？」

「あれ？ボクの事知ってるの？」

「まあな、……っておい優子、なんで俺の腕の関節を握っている？」

優子が俺の間接を凄い握力で握っている。(誰にも見えない用に……)

「さあ？」

「……言っておくけど、俺が知っているのは、試験召喚戦争の時保健体育の点数が高いぐらいだ」

「えっ？何で知ってるの？」

「俺の祖母さん……学園長から聞いた」

「「「ええっ！！！！」」」

……まあ、驚くよな……

「……蓮って学園長の孫なんだ……」

「……優ちゃんワタシの存在忘れてる」

「アッ、ごめん……」

「そう言えば、君たちの名前知らないね。教えてくれる」

工藤が名前を聞いてきた。

「俺の名前は、川上蓮。よろしく」

「ワタシは、川上絵美里。秀吉君の彼女です」

・・・何つう事言っただよ絵美里・・・

「えええっ!?!も、もう絵美里と秀吉ってそんな関係に・・・」

「うん もうキスもしたよ」

「えええっ!?!?」

・・・優子驚きすぎ・・・

「なあ、取りあえず弁当食おうぜ・・・」

「そういえば、優ちゃん達お弁当持ってきたの?」

「うん、一応持ってきたけど・・・」

「蓮兄と食べたいって思ったんじゃないの?」

「絵美里、ちょ、ちょっと黙って・・・」

?どつしたんだろっ

「じゃあ、ボク達もここで食べようかな」

「・・・雄二と一緒に食事できてうれしい」

賑やかなお昼になるな・・・

第七話俺と専問とAクラス（後書き）

今回は、久しぶりの投稿です。

## 第八話俺と弁当と予感

蓮Side

「ああ、平和だな・・・」

俺は弁当を食べながらそう呟いた・・・

「おなか減ったな・・・」

俺の横では明久が嘆いてた。そう言えば何も食ってないな・・・明久。

「お前、弁当食わないのか？」

「・・・持ってきてないんだ」

「じゃあ、俺の弁当、食うか？」

今回、多く作ったからな・・・

「えっ！？いいの？」

「ああ」

「ヤッター！！！！！！！！」

「・・・そんなんで喜ぶことか？」

なんて言うか・・・単純。

「最近、塩と水しか食べてないから・・・」

「それ食べたって言わないぞ！！！！」

舐めたが正解だと思う。

「美味しい・・・ホントに久しぶりだよ・・・」

よく生きてられるな・・・

「・・・今夜、俺の家来るか？何か作ってやる」

「いいの？・・・」

「ああ、一人増えても作る量は変わらない」

・・・それは、そうと・・・

「おい、明久お前、姫路の事好きだろ？」

「ふええつつ！！」

図星みたいだな・・・

「・・・カマを掛けただけなんだけどな（ニヤニヤ）」

「ひ、姫路さんにはこの事・・・」

「内緒にしてやるよ」

「……ありがとう」

さて、絵美里は何を話してるのかな……

『……だから積極的に……』

『『そんなの無理（です！）（よ！）（よ！）』』

……何か姫路と優子と話してた……

「さて……どうするか」

「ねえ蓮兄」

「？なんだ絵美里？」

「優ちゃんと瑞希を家に呼んで、一緒にご飯食べていい？」

「？別にいいけど、どうしたの？」

理由が気になる。

「ちょっとね」

？何だろっ何か嫌な予感が……

「まあ、いつか」

「のう、蓮ワシも良いかの？」

「ああ、勿論だ」

「どうせなら、ボク達も良いかな？」

「……………（コク、コク）」

「……………私たちも良い？」

工藤、ムツツリーニ、霧島、坂本も来ることに…………

「良いけど、この人数なら何が良いだろ？…………たこ焼きかな？」

たこ焼きは大人数で食べて方が楽しいから…………

「お買い物は、ワタシがしとくから、蓮兄は実験報告してね」

「ああ、別に良いけど…………何か嫌な予感が…………」

「ねえ、蓮…………」

「うん？なんだ？優子？」

優子が俺の肩を突つついた。何か話があるのかな？

「その…………放課後、校門の所に来て話があるの…………」

そして、顔を真っ赤にしてどこかに走り去って行った。

?どうしたんだ?

『明久君、話があるので屋上に来てください』

『えっ?・・・』

・・・明久も似たような状況になっている。

・・・そして放課後・・・

優子に会いにAクラスに行ったのだが・・・まだ授業中だった。なので、祖母さんの部屋に行き報告をした。

「祖母さん、白金の腕輪のバグは心配ない。俺の点数で、暴走しなかったから大丈夫だ」

一応書類を書いたけど念のため・・・

「分かったさね、ご苦労さん」

・・・随分あっさりしてるな。まあいい、取りあえず、優子が待っている校門に行こう。

**第八話俺と弁当と予感（後書き）**

次回、多分、恋愛系の話になります。

## 第九話「アタシと友情と告白の準備」

優子Side

アタシは今、Fクラスにいる・・・普段は来ないけど、幼なじみの蓮がいるから来た。

今回の目的は、蓮に会うこともあるけど・・・

「ねえ、優ちゃん」

絵美里に蓮に好きな人がいないか、聞くためだ。

「な、何かな絵美里？」

「優ちゃんは・・・蓮兄の事好き？」

「ふええ!？」

な、何行き成りそんな事聞くの？

「で、どうなの?」

「どづつって言われても・・・」

「ふくん、やっぱり優子、川上君の事好きなんだ・・・」

「・・・素直になった方が良い」

代表達に囲まれた・・・

「だ、代表に愛子アタシは、別に蓮の事・・・」

「好きじゃないの?・・・」

「・・・好きです」

絵美里に言われて誤魔化そうとしたけど・・・誤魔化せなかった。

「やっぱり好きなんだ・・・」

「好きなんだけど・・・蓮に好きな人がいないか気になるの・・・」

「なら、大丈夫だよ」

「な、何で?」

「だって、蓮兄も優ちゃんの事好きだからだよ」

「・・・えっ?・・・」

絵美里の言うことが信じられなかった。

「本当?」

「本当だよ。蓮兄ってアメリカにいるとき告白されたけど、好きな人がいるって言って断ってたよ」

「そ、そうなんだ」

・・・うれしいな・・・

「木下さんと川上君は両思いなんですか・・・。羨ましいです・・・」

姫路さんまで話しに加わってきた。

「・・・もしかして瑞希は吉井君の事・・・好きなの？」

「ふえええええ！？」

姫路さんの顔が赤くなっている。

「ふ〜んそうなんだ・・・」

「え、絵美里ちゃん・・・今のこと・・・」

「内緒にしてあげるよ」

「あ、ありがとうございます」

「でもねえ」

？絵美里が意味深な顔をした。

「吉井君も瑞希の事好きだと思っよ」

「ふえええええ！！！！？？？？？？？」

さらに顔が赤くなっている。

「そ、そうですか？」

「うん、そう思うよ」

・・・そうなんだ、姫路さんも両思いなんだ。

「ねえ、いつから好きなの？」

「えっと・・・、小学生の頃からです・・・」

「へえ、そうなんだ。ワタシ達もそうなんだよ」

「そ、そうね、アタシも蓮の事小学生の頃から・・・」

・・・アタシ達似てるわね・・・

「片思いつて良いわよね」

「あの・・・絵美里ちゃん・・・」

「うん？何？」

「あの、どうすれば、絵美里ちゃんのように告白できますか？」

「あ、アタシも気になる！！」

そう、アタシも絵美里の用に蓮に告白したい。

「うん、どうすれば良いって言われても・・・ただ積極的になつた方が良いと思うよ」

「積極的ですか・・・」

「そう、ただ自分の思いを相手に積極的にアピールすればいいのよ」

「えっと・・・要するに・・・」

「・・・だから積極的に告白するべきよ!」

「そんなの無理です(よ)!」

「そんな事言ってる他の人に取られるよ」

・・・たしかにそうだけど・・・

「わ、わかりました。私、今日明久君に告白します!」

「あ、アタシも蓮に告白する!」

絶対に蓮にこの思いを伝える。

「あの、木下さんお互いに頑張りましょう!」

「ありがとう、姫路さん、アタシの事優子って呼んで」

「はい、優子ちゃん、私の事を瑞希って呼んでください」

「うん」

今、ここに新しい友情が芽生えた。

因みに絵美里は、何か蓮と話してた。

「瑞希に優ちゃん、今日はたこ焼きパーティーとお泊まり会するから、それまでには告白してきてね」

・・・アタシは、蓮に・・・

「ねえ、蓮・・・」

「うん？なんだ？優子？」

「その・・・、放課後、校門の所にきて、話があるの・・・」

アタシは顔を赤くして走り去った。

・・・すると、瑞希は吉井君に・・・

「明久君、話があるので屋上に来てください!!」

「えっ?・・・」

第九話「アタシと友情と告白の準備」(後書き)

次回、カップルが2組出来ます。・・・たぶん

## 第十話「アタシと蓮と告白 私と明久君と告白」

優子Side

・・・まだ蓮は来ない・・・

「やっぱり、アタシじゃだめだったのかな？」

・・・アタシは諦め掛けた。

「悪い、優子。待ったか？」

「うつん今来たところ」

・・・よかった、来てくれた・・・

「で、優子話って？」

「・・・蓮、アタシ・・・」

アタシは三年前に言えなかった事を言う。

「アタシ、蓮の事が好き・・・」

「えっ？・・・」

「アタシは、小さい頃から蓮の事が好きだったの！だから、その、蓮アタシと付き合っって！！」

言えた・・・やつと言えた・・・。

「・・・優子、俺でいいのか？」

「うん！ー！蓮がいいの！ー！」

「・・・その、俺も優子の事が好きだ！ー！」

「っ！ー！じゃ、じゃあ」

「俺からも、その・・・お願いします」

「・・・う、嬉しい・・・」

「蓮・・・」

「優子・・・」

そして、アタシと蓮はキスをした・・・

瑞希Side

「・・・緊張します・・・」

「大丈夫です・・・大丈夫です」

私は、今屋上で明久君を待っています。

「明久君・・・」

ガチャ・・・

「ごめん、姫路さん。待った？」

「あ、明久君、わ、私も今来たところです」

・・・凄く、胸が高鳴ります。

「あの・・・姫路さん話って？」

「え、えっと明久君」

「何？姫路さん？」

「私、明久君のことが好きです！！」

「えっ？・・・ごめん姫路さん、もう一回言って」

うう、恥ずかしいです。

「私は明久君の事が好きです！！吉井明久君、私と付き合ってください！！」

・・・明久君は何故か俯いています。

「あの、姫路さん・・・」

「なんですか・・・？明久君？」

「・・・僕何かでいいの？僕は頭が悪いし・・・僕何か、姫路さん

とは、釣り合わないと思う……」

「そんなの関係ありません!」

「ひ、姫路さん?」

「私は、明久君の良いところをたくさん知っています。優しいところ、人のために一生懸命になれるところ……」

「姫路さん……。僕も姫路さんのことが好きだ……」

「えっ……」

「小学生の頃からずっと、姫路さんの事が好きだ」

「明久君……」

「不甲斐ない僕で良いならお願いします」

「はい……」

うれしい、とても嬉しいです……

「あの、明久君……」

「うん?何?姫路さん?」

「あの、明久君。私のこと、瑞希って呼んでください!」

「えっ……？」

「その……恋人同士なのに、さん付けで呼ばれるのは……」

「うん、わかったよ。瑞希……っ!!」

そして、私は、明久君の唇に私の唇を押しつけました。

「み、瑞希行き成り何を……」

「す、すみません。どうしても止まらなくて……」

「と、取りあえず行こうか……」

明久君は私の手を繋ぎ歩き出しました。

私は、とても幸せです。

## 第十一話「僕と驚きと心配」

明久Side

「ふう……」

僕は、その後瑞希と一緒に下校して、瑞希の家の前まで来ている。

「あの、明久君……」

「うん？何瑞希」

「絵美里ちゃんは、お泊まり会をやるって言っていましたが……、参加しますか？」

「えっ？聞いてないけど。まあ、参加したいけど……部屋あるのかな？」

「はい、空き部屋が幾つもあるそうで……」

……そうなんだ……

「じゃあ、参加しようかな……」

「では、準備できたら二人で行きませんか？」

「うん。行くつか」

僕は着替えなどを取りに行った。

・・・10分後・・・

「まだ来てないな・・・」

少しだけ早く来てしまった。瑞希の家の前で待っている。

「あ、明久君。待ちましたか？」

「ううん。今来たところだよ」

すると、瑞希の後ろから女の子が出てきた。

「瑞希、その子は？」

「えっと・・・」

「初めまして、姫路瑞希の母の瑞穂です。」

「えっ・・・？」

うそ！！全然お母さんに見えない！！

「で、あなたは？」

「あ、僕は吉井明久と言います・・・」

「私の彼氏です」

「み、瑞希、行き成り何を・・・」

「あの抱き枕と女装写真の……」

「……瑞希、君は何を買っているんだい……」

恐らく、ムツツリ商会から買ったんだろう。

「そ、そんな事より、明久君。行きましよう!!」

僕の手を引っ張り、瑞希は走り去ろうとした。

そして、しばらくして……

「み、瑞希もう良いんじゃない?」

「そ、そうですね」

十分くらい走ったから、瑞希の体が大丈夫なのか心配だ。

「ところで、瑞希。瑞希は蓮の家知ってるの?」

「いえ、明久君もですか?」

「うん……どうしよう」

困っていると……後ろから声が聞こえた。

「お〜い、明久、姫路」

「あれ?蓮?」

そこには蓮がいた。なんで？

「・・・絵美里が家の場所を教え得てなかったから、優子と一緒に迎えに来たんだよ・・・」

あつ、蓮の後ろに木下さんがいる。

「そう言えば、蓮と木下さんって付き合ってるの？」

「ま、まあな」

「優子ちゃん。川上君に告白できたんですか？」

「うん。瑞希は？」

「そ、その。告白出来ました」

？瑞希と木下さんって仲良かったけ？

「ほう、明久もか」

「う、うん。そんな事より、はや・・・」

プルル・・・（蓮の携帯が鳴る音）

「悪い俺のだ。もしもし？」

『れ、蓮、た、助けてくれぬか……。え、絵美里落ち着くのじゃ  
ぎゃあああ！！！...！』

ピッ!..!

「・・・何があったの？」

「さ、さあな俺達と入れ違いで絵美里が木下家に入ったからな・・・」

「・・・たぶん、秀吉の演劇用の女物の服を見つけたからだと思うよ・・・」

「と、取りあえず行こうぜ」

秀吉は無事かな？

## 第十二話「俺と自宅とカオス？」

蓮 Side

今、俺は明久達を自分の家まで案内している。

「明久」

「何？蓮？」

「お前にこれをやる」

俺は、姫路に見えない用にある物を渡した。

「これは？」

「動物園のチケットだ。明日にでも姫路と行ってこい」

「えっ？良いの？」

「ああ、別にいいぞ」

「木下さんで行かないの？」

「優子とは映画を見に行くから別に良い」

「そっかありがとう！！」

そんなこんなで、話していると家に着いた。

「ここが俺達の家だ」

「でか!!」

明久が驚いてるな…まあ、驚くは。

「客室も幾つかあるからそこで寝てくれ」

「そういえば、美波は？」

「島田は用事があるから来れないって」

入ると…カオスだった。

まず目に付いたのは、目茶苦茶疲れている秀吉と凄い元気な絵美里。鼻血まみれのムツツリー二と工藤愛

子。ぐるぐる巻きにされてる坂本と霧島翔子。

一体何があった？

「秀吉、お前はどうした？」

「蓮…絵美里に折檻を受け…童貞を奪われたのじゃ…」

「なるほど、ムツツリー二もそれが原因か…」

「因みに、雄二は霧島に拉致られたのじゃ」

…かわいそうに。

「蓮兄、材料買ってきたから早くやるつよ」

「そうだな。やるか」

因みに、ウチのたこ焼きは、たこだけじゃ足りないから他の材料も加えてる。

…三十分後…

結構な量を作ったが、足りなかつたらまた作ろう。

「じゃあ、食べますか」

「……いただきます!!」「……」

すると…絵美里が秀吉に。

「秀吉君、アーン」

「アーンじゃ」

・・・こいつらラブラブじゃねえか。

「あ、明久君。アーン」

「ふっえ!?!」

「雄……」

「俺はいい!..!」

「ムツツリーニ君」

「...いいない」

「じつはね、おまねしてやるよ。」

第十二話「俺と自宅とカオス？」（後書き）

次回、明久が暗躍(?)します。

### 第十三話「僕と復讐と罫」

明久Side

「……………暇だな……………」

「どうしたんですか？明久君」

「嫌、別に何でもないよ。瑞希……………」

「うーん何かやること無いかな？」

「……………吉井が瑞希の事を名前で呼んでる？」

「何かあったのかな？」

「霧島さんと工藤さんが僕らを見てる。……………そうだ！！」

「ちよつといいかな？霧島さん、工藤さん、川上さん」

「……………何？……………」

「みんなは好きな人の本音聞きたくない？」

「……………聞きたい……………」

「うん、みんな乗ってるね」

「僕からの提案なんだけど……………」

おもしろい事になりそうだな。

……食後……

「ふう、腹いっぱいになったな」

「……寝るまでまだ時間がある」

「じゃあ、何かゲームやる？」

「そうだな」

ふふ、作戦道理。

「じゃあ、こういうゲームやろう。あるお題を出すからみんなで答えてくの。答えられなかったら、罰ゲームね」

「「「OK」」」

ふふ、雄二達は地獄の扉を開けたね。

「じゃあ、私がお題出すね。お題は『自分の好きな人』」

「「「はああ？」」」

「まず私から、木下秀吉」

「……坂本雄二」

「はい、秀吉君」

秀吉にふる、川上さん。

「えっ、えつと。え、絵美里じゃ!!」

「……………(ポツ)」

顔を赤くする川上さん。さてと、次は……

「俺？」

蓮だ。

「き、木下優子!!」

「れ、蓮!？」

「次は優ちゃんだよ」

「えっ!?!……………川上蓮!!」

顔が赤くなっている木下さんと蓮。

「次は、雄二だよ」

「な、何でだ!？」

「……………雄二好きな人は？」

「ああ！！翔子だ！！」

「ポッ！！」

「翔子顔を赤くするな！！」

さて後は……

「次、ムツツリーニだよ」

「……っ！！」

「駄目だよ。僕も答えるんだから」

「……工藤愛子！！」

「む、ムツツリーニ君！？」

「さて、次は愛子よ」

「優子、こ、答えないと駄目？」

「駄目よ。アタシも答えたんだから」

「うう、ムツツリーニ君！！」

ふふ、赤くなってるよ二人とも。

「最後は僕だね。瑞希」

「わ、私は明久君です」

……僕達も赤くなった。

「ところで、部屋割りはどうなるの?」

「部屋は3部屋開いてるから男女別に……」

「ちょっと待った!!」

川上さんが叫んだ。

「何だよ絵美里」

「部屋割りはもう決めたよ」

「……聞いてないけど」

「だって、女子だけで決めたから」

い、何時の間に……

「……雄二は私と」

「ムツツリーニ君はボクとだよ」

「秀吉君は私と」

「蓮はアタシ……」

「あ、明久君はわ、私と」

き、聞いてない。

「「「「「却下だあああああ！……！……！」「」「」「」

「はい、認めません」

受け流された！？

「じゃあ、鍵は渡してあるか、後はご自由に」

「……雄二行く」

「ちょ、ちょっと待て、しょ、ぎゃあああああ……！……！……！」

雄二、ご愁傷様です。

「ムツツリーニ君行こうよ」

「……っ！……！（ジタバタ）」

「秀吉君は私の部屋、優ちゃんは蓮兄の部屋ね」

そして、ムツツリーニと工藤さん。秀吉と川上さんが部屋に消えた。

「れ、蓮。い、行こう」

「お、おう」

僕らだけが残った。

「あ、明久君……」

「み、瑞希を落ち着いて」

……僕達は夜の記憶が無くなった。

## 第十四話「俺と優子と初デート」

蓮 Sid

……俺達は朝から疲労が溜まっていた。

「」「」

……優子達が元気なのは……聞かないで欲しい。

「……疲れた」

「一体、昨日は何があったんだ？」

「思い出さない方が良くと思うぞ……」

「嬉しいような、悲しいような」

……そう言えば。

「明久と姫路がないけどどうしたんだ？」

「……姫路を止めてもらっているんじゃない？」

「何で？」

「蓮、世の中には知らなくて良いことがあるのじゃない……」

「？」

秀吉達が遠い目をしてるけど、どうしたんだ？

「ご飯できたよ」

今日は絵美里がご飯当番。

「……おはよう」

顔を赤くした明久と姫路一緒に起きてきた。

「明久、よくやった」

「グッジョブじゃ」

「……（コクコク）」

本当に何何だ。

十分後。

「なあ、優子」

「何？蓮」

「映画見に行かないか？」

「えっ！？」

俺は優子をデートに誘った。

「嫌ならいいんだけど」

「うっん！ー！ちょっと服変えてくるから」

「おう、じゃあ十時に駅集合な」

優子Side

「へ、変じゃないよね」

今、アタシは駅に向かってる。

代表と愛子にアドバイスをもらって淡い青のワンピースにしたんだけど……。

「ま、間に合ったよね？」

ちょうど十時に着いたけど、蓮はどこ？

『ねえ、君暇？お姉さんと遊ばない？』

「すみません。彼女を待っているんで」

『え〜』

……ナンパされてる。

「お、優子。おーい」

蓮がアタシに気がついて手を振ってる。

……モデルみたい。ナンパされても仕方がないってくらいかい  
い。

「れ、蓮待った？」

「いや、今来たところだ。行こうぜ」

そういうと、蓮はあたしの手を握ってくれた。

蓮Side

今、俺は優子と映画館にいる。

「優子、何の映画見る？」

「うんあの映画かな？」

優子は今話題の恋愛映画を指さした。

俺は映画のチケットを買った。

「すみません。『二人で恋愛映画を作ろう』を二枚ください」

「あの、カップル席がありますがそれにしますか？」

「じゃあ、それで」

「ありがとうございました。」

映画館に入り、まず売店に行った。

「優子なんか飲むか？」

「じゃあ、コーラ」

「えっと、コーラを二つ、ポップコーンを一つください」

さて、見に行くか。

「？姉上？」

「うん？秀吉に絵美里？」

絵美里と秀吉がいた。あいつらもデートか？

「あれ？蓮兄もデート？」

「まあな」

「もしかして恋愛映画を見るの？」

「そうだけど」

「すごい偶然ね」

そんな話を話しながら席まで来たのだが、

「……………」

「?どうしたの?」

「嫌なんでもない」

暗い中優子と二人きりでどきどきするなんて言えない。

正直映画の内容は覚えてない。

二時間後

「優子、この後どうする?」

「そ、そうねまずは……買い物かしら」

く

「っ!?!」

「なあ、優子何か飯食いに行かないか?」

「う、うん」

ちて、この後どう回るのか?

第十四話「俺と優子と初デート」(後書き)

どうも、作者の米田です。

テスト勉強でしばらく更新できませんでした。

## 第十五話「僕と瑞希と初デートと殺気」

明久Side

「み、瑞希」

「何ですか？明久君？」

「あのさあ、デートに行かない？」

「えっ？」

その、蓮から貰った動物園のチケットを使おうかと。

「駄目かな」

「いいえ、だ、大丈夫です！！」

瑞希が準備あるらしく、9時に駅前に集合することにした。

…九時…

「やば、遅れそう」

瑞希帰っていないよね？

駅に行ってみると、瑞希がいた。

「み、瑞希ごめん待った？」

「い、いえ。今来たところです」

「ホントにごめん。じゃあ、行こうか？」

「は、はい!!」

そして僕は、瑞希の手を握った。

「あ、明久君？」

「どうしたの？瑞希」

「い、いえその、嬉しいです」

瑞希は顔を真っ赤にしていた。

30分後

動物園に着いたけど……瑞希がずっと顔を真っ赤にして俯いてるんだけど。

「瑞希？大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です。あの明久君行きませんか？」

「そうだね、行こうか」

それはそうと、何か殺気を感じるんだけど？

美波 Side

ウチは今、葉月と一緒に動物園に来てるんだけど。

『瑞希？大丈夫？』

アキと瑞希が一緒にいる。しかもアキが瑞希のこと名前ですんで呼んでい

る。しかもアキと瑞希が手を繋いでる。

アキと瑞希って付き合ってるのかな？

「お姉ちゃんどうかしましたか？」

「ううん、何でもないよ」

ちょっと見張ろっかな。

明久 Side

「明久君、可愛いですね」

「う、うんそうだね」

今、ウサギコーナーにいるんだけど、本当に瑞希ってウサギ好きだね。

「明久君？どうかしたのですか？」

「うっん、ウサギを抱いてる瑞希って可愛いって思って

「か、可愛いですか？ はっ

ほ、本当に可愛い。

何か殺気が強くなったような？

「ねえ、瑞希他のコーナーに行かない？」

「そ、そうですね」

レッサーパンダコーナー。

レッサーパンダの親子がいるけど可愛いね。

「あ、あの明久君」

「何かな瑞希？」

「あの将来子供は何人が良いですか？」

「ふー！ー！

「え、え〜と二人くらいかな？」

「そ、そうですね」

「ソクー！ー！ー！

何か物凄い殺気が……ライオン、トラ、チーターなどの猛獣が怖が  
つてる。

「み、瑞希お腹すかない？そろそろお昼にしない？」

「そ、そうですね。そうしましょうか」

「じゃあ、あのレストランでいいかな？」

「はい」

取りあえず、近くのレストランに入った。

僕は、メニューを見てすぐ決めた。

「僕は、カツとエビフライ定食にしようかな」

「わ、私はヘルシーハンバーグ定食で」

二十分後

頼んだ定食が出てきた。

美味しそうだな。

「いただきます」

「うん、おいしいね」

「ヘルシーで美味しいです」

衣がサクサクして美味しいな。

「瑞希、エビフライ食べる？」

「ふえっ！？ は、はい」

「じゃあ、アーン」

僕は、エビフライをフォークで刺して瑞希の口まで運んだ。

「あ、アーン。(もぐもぐ)」

「どっ？」

「はい！！とても美味しいです」

それは、よかった。

っ！！また殺気が強くなった。

「あの、明久君」

「何？」

「アーン」

今度は瑞希が僕に……

「(もぐもぐ)うん、おいしいね」

「そ、そうですね」

嬉しそうな顔をする瑞希。うんこっちも嬉しくなるな。

……ってまた殺気が強くなった。

十分後

「ご馳走様でした」

「おいしかったですね。明久君」

「そうだね、瑞希そろそろ行くところか」

僕は伝票を持ってレジに行った。

「あ、明久君待ってください」

そして、三時間後。

だいたいの動物を見た。

「そろそろ帰ろうか」

「あ、あの明久君」

「何かな瑞希？」

「帰る前に、クレープを食べませんか？」

瑞希はクレープやを指さした。

「うん、そうだね」

「あの、さっきは明久君がお金払ったので私が」

「いや、それは」

「駄目です」

……意外に瑞希は意志が強い。

「じゃあ、チョコで」

「わかりました。私はクリームで」

二分後

「おいしいですね、明久君」

「うんそうだね」

とじろで、……

「瑞希、クリーム付いてるよ」

「えっ？どこですか？」

「僕が取ってあげるよ」

そして、僕は瑞希に……キスをした。

「っ！！明久君！！何するんですか！！！」

「ごめん、瑞希が可愛くてつい」

「っ、ゆ、許しません」

「ごめん」

「だけど、……愛してるって言うてくれるな許します」

「瑞希……愛してるよ」

僕は瑞希にささやいた。

「っ！！あ、明久君。もう一度キスしてください」

「うん、……」

そして、僕は瑞希とまたキスをした。

「明久君、大好きです」

月曜日

登校して初めて見たのは……補習室に連行されるFF団のみんなだ。

「なにがあったの？」

取りあえず、蓮に聞いてみた。

「ああ、俺と優子が付き合ってるのがばれて、襲いかかって来たから召喚獣で補習室に連行させたんだ」

「ふうん」

「アキキ!!!!!!!!!!!!!!」

「っ!!!美波!?!」

「これどういう事なの?」

そして、美波はある写真って!!!

「何故だ!?!」

「偶然、動物園にいたのよ!?!」

それは、僕と瑞希が手を繋いだり、キスをしたりしている写真だった。

「さてと、説明して貰おうかな」

「HR始めるぞ」

この時、鉄人が来なかったら死んでいた。

**第十五話「僕と瑞希と初デートと殺気（後書き）」**

次回は、プール編になると思います。

第十六話「俺と昼飯と臨死体験」

蓮 Side

色々あって、昼休み。

今日もAクラスの三人が来ていた。

「絵美里、弁当」

今日の当番は絵美里。

「はいは〜いって……」

「どうした？」

「弁当忘れた」

「なにやってんだ!!」

「でも、秀吉君のは……」

「それ、おかしい!!」

なんで、身内の弁当は忘れるのに恋人のは持ってくるんだ!!

「ね、ねえ。蓮」

「何だ優子？」

優子が顔を赤くしてモジモジしてる。

「アタシ、蓮の分の弁当作ってきたの、食べる？」

優子は、もう一箱弁当を持ってきてた。

「ああ、ありがとう!!」

うん、さすが、優子だな。

「あ、あの。明久君」

「な、何かな？ み、瑞希？」

何でだろ？明久の顔が青ざめてる。

「あの、私、おべ……」

ダッ!!!!（明久、ムツツリーニ、秀吉、雄二がダッシュして逃げる）

ガシッ!!（優子達が捕まえる音）

「何処行くの秀吉？」

「何処行くのかな、吉井君。駄目だよ。自分の彼女から逃げちゃ駄目だよ」

「……雄二逃がさない」

「「「離してくれ!!!」」」

?どうしたんだ?

「どうしたの?秀吉君?」

「後生じゃ!!絵美里、姉上、蓮。逃がしてくれ!!」

「本当に何があつた?」

不思議だな。

「じゃあ、ボク達はジュースでも買ってこようか」

「アキ達は先食べていて」

「……絵美里と川上は雄二達が逃げないように、見張ってて」

「了解」

霧島、工藤、島田、優子は飲み物を買に行った、

ちてっ、

「ど、どうする雄二?」

「どうもどうもねえよ」

「じゃあ、皆さんどうござい」

何かを相談する明久と雄二。弁当を出す姫路。

「じゃあ、貰うぞ。姫路」

優子の弁当は、優子の目の前で食べて感想言いたいからな。

「はい、どうぞ」

「いただきます」

「……アツ……」

「モグモグ。……ごぱっ!! (ドサ)」

な、なんだ!? 今天使が見えたぞ!!

「蓮兄どうしたの?」

何故だ? 何故絵美里は平気なんだ?

絵美里はパクパク食ってる。

「ん? ゴパツ!!」

「え、絵美里!! しっかりするのじゃ!!」

「明久!! これは一体どう言うことだ!!」

「うんそれは……」

「蓮!! どうしたの!?!」

……優子がいる。あれ? 意識が朦朧と……

「優子、死ぬ前に会えてよ……」

「キヤー蓮!!」

あーお花畑が見える……。

あれ? 後頭部に何か柔らかい物が……

「蓮? 良かった……。生き返った」

何故だろう? 優子の顔が目の前に……って? もしかして膝枕してるの!?!

「優子俺は……」

「瑞希の毒入り料理を食べたのよ。今、絵美里と代表が説教してる」

そうか、あれは毒なんだ。絵美里復活するの早いな……。

「それで、土曜日にお料理を教えようって事に……」

「そうなんだ、あつ」

「何蓮? どうしたの?」

いや、その。

「優子の作った弁当、食ってないなって」

「えっ？」

「いや、優子の目の前で感想言いたいなって……」

「……」

優子が顔を赤くしている。俺も少し恥ずかしい。

「じゃあ、いただきます」

まずは、美味しそうなハンバーグから。

「うん、おいしい。腕を上げたな」

「う、うん。三年間、は、花嫁修業したから」

「そうなんだ」

俺と優子は顔を赤くして俯いた。

十分後。

何とか昼食時間が終わった。

「そういえばさ、川上君と絵美里の召喚獣ってどんな装備なの？」

工藤が装備のことを聞いてきた。

「見せてやるうか？ 起動―<アウェイクン>!!」

「そして、試験召喚―<サモン>」

呼び声で俺の召喚獣と絵美里の召喚獣が出てきた。

俺は前と一緒に装備。絵美里は……。

「素手？」

「違うよ。ダイナマイト持ってるんだよ」

「……怖っ!!」

「ちなみに、絵美里のアメリカにいた時のあだ名は爆弾魔のエミリ

」

「で、点数は」

『総合科目 川上 蓮 8568点』

『総合科目 川上 絵美里 6995点』

「……ええええええええええ!!!!!!!!!!」

まあ、驚きますよね？

「……私より点数が高い」

「高いかなと思ってたけどこれほどとは」

「なんでFクラスにいるの？」

聞かれて考える俺。

「それは、監視者の仕事で……あつ」

「どうしたの？ 蓮」

「みんな日曜は暇か？」

「暇だけ何で？」

「いや、祖母さんが掃除するならプールを貸しきりにして良いと……？ どうした困った顔をして？」

明らかに工藤、島田、優子がある部分に目をやる。そんな三人に。

「好きな人に自分の水着姿見せたくないのか？」

女子は全員参加するそうです。

## 第十七話「俺とプールと水着の楽園（前編）」

蓮Side

「で、お前らはどっする？」

俺は参加するかわからない明久達に聞いてみた。

「うーん僕は参加しようかな。瑞希の水着姿みたいから」

「……………（ぼっ）」

姫路が赤くなってる。……………島田が凄い殺気を出してる。

「ワシも絵美里の水着姿みたいから参加するぞい」

「……………俺も愛子の水着姿みたい」

「……………（ぼっ）」

絵美里と工藤が赤くなってる。

「じゃあ、日曜日タオルを持って十時に校門の所に集合な」

……………日曜日……………

「絶好のプール日和だな」

「そうね」

俺は優子と一緒に学校に向かっている。ちなみに絵美里と秀吉は先に行った。

「あれ？ 蓮に木下さん？」

後ろを振り返ると明久と姫路がいた。

「おう、明久お前もか」

「うん、まあね」

優子は何か姫路と話していた。

「じゃあ、行くとするか」

……十分後……

プールに着くと絵美里と秀吉、工藤とムツツリーニがいた。

「おはよー吉井君に瑞希」

「なんじゃ、お主らも恋人同士で来たのか」

「……似たもの同士」

「あははは」

「で、雄二と霧島は？ 後、島田は？」

「雄二は霧島と鍵を取りにいったのじゃ。島田は……」  
すると……

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」

「わわっ」

明久の背中に見知らぬ女の子が飛びついてきた。

「秀吉、あの子は?」

取りあえず、秀吉に聞いてみよう。

「ああ、蓮は初めてあつのじゃな。あの子は島田葉月。島田の妹じゃ」

「なるほど、島田の妹ね……」

確かに似てるな。そして、島田もやって来た。

「そう言えば、バカなお兄ちゃん」

「うん? 何かな?」

「綺麗なお姉ちゃんとバカなお兄ちゃんは付き合ってるのですか?」

「えっ? 何で?」

「前動物園で見かけたから気になったのです」

ああ、なるほどね。

「うん、そうだね。僕と瑞希はその……、付き合ってるんだ」

「そ、そうなんですか？　なら葉月応援します！」

「ありがとうございます……」

葉月の頭を撫でる明久。葉月は笑顔になっているが、島田が凄い殺気を出してる。凄い居づらい。

「うん？　どうしたんだ？」

そこに雄二が鍵を持って現れた。うん、ナイスタイミング！

「おっ、島田妹も来てるのか？」

「はいですっ！」

「そうか、じゃあ早速着替えとするか。女子は翔子に、男子は俺に付いてきてくれ」

俺達は雄二に付いてきているのだが……

「言い忘れたが、秀吉はあれを使ってくれ」

雄二が指さした先には……秀吉専用更衣室。

「ババアからの命令だ。すまないが我慢してくれ」

「何故、ワシだけ」

「お祖母ちゃん……後でお仕置きだね」

うん、絵美里が目茶苦茶怖い。

## 第十八話「俺とプールと水着の楽園（中編）」

蓮Side

俺達は今、水着に着替えているのだが……

「ムツツリーニ、取引しない？」

「……話を聞こう」

「何、監視者の目の前で取引してるんだよ」

全く、こいつらは……。

「今日撮る瑞希の写真をすべて僕に売って欲しい」

「……どうするか」

「ムツツリーニ、君は工藤さんの水着写真を他の人に買われてもいいのかい？」

「……乗った」

切り替えが早いなムツツリーニ。

「……仕方ない。今回はただで良い」

「えっ？ いいの？」

「……お前の気持ちができるからな」

「ありがとう。あ、蓮も内緒ね」

「うん？ どうしようかな」

「……木下優子の写真欲しくないのか？」

「仕方ない。……黙ってやる」

うん？ 監視って何それ？ 食べれるの？

パパッと着替えた俺達はプールの方に向かった。そこには水着姿の島田姉妹、絵美里、霧島。それに目を押さえてのたうち回ってる雄二がいた。

そういえば、あいつ先に行っただけ。

「あれ？ 優子は？」

「うん、何かね覚悟が出来てないらしいよ」

「そうか」

ああ、早く優子来ないかな……。

「れ、蓮」

おっ、優子の声が聞こえる。振り返ってみると水着姿の優子が……。

「つて、蓮、大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だ。優子の水着姿が目茶苦茶、可愛かったただけだ」

「か、可愛いって」

うん、本当にかわいい。思わず、鼻血が出るほど……つて俺はどうかの変態か!？」

「お〜い、蓮に絵美里」

うん？ 秀吉が来たか……、ま、まずい!!

「秀吉!! 逃げろ!!」

「うん？ どうしたのじゃ？ 蓮。……絵美里どうしたのじゃ？  
ワシの腕を持って？」

「ヒデオシクン、アッチデオハナシヲキカセテクダサイネ」

秀吉は女物の水着を着ていた。絵美里が、バーサーカーモードになった。そして、目にも留まらない早さで秀吉が連れていかれた。

「……秀吉、お前の冥福を心から祈ろう」

『どうしたのじゃ？ 絵美里、ワシをこんな所まで連れてきて』

『ヒデオシクン、ナンデオナナノコノカッコヲシテルノ？』

『嫌、何故って言われてものう……、待つのはじゃ絵美里!! ワシ

の右腕はそつちに曲がらなっ……………」

『ユウチャン直伝セツカンワザ!!』

……………うん、物凄くグロテスクな音が聞こえる。

「……………優子」

「正直悪いことをしたと思ってるわ……………」

「取りあえず、もう絵美里に余計なことを教えるな」

そして、振り返ると……………って!!

「何だ!? —瞬目を離してるときに何が起きた!?!」

ムツツリーニと明久が鼻血を出して倒れていて、雄二がまたのたうち回ってる。……………結局、明久達が復活するのに15分かかった。

「ふう、酷い目にあつたのじゃ」

「大丈夫?」

まあ、ほとんどが自業自得だけど……………。

「にしても……………、折角の日曜日なのになんだよあのカオス」

ムツツリーニは鼻血を出して倒れてるし、何故か明久達は泳ぎながら逃げてるし……………ん?

「うん？」

「どうしたの蓮兄？」

「いや、何か変な気配感じたような……」

『お姉様!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

水着を着た縦ロールの女の子が突進してきた。あれは確か……。

「清水美春、男子より女子に興味がある生徒。盗撮をしている疑惑あり。観察処分者候補第一位」

「詳しいな……」

おっ、雄二が寄ってきた。

「まあな、一応俺は監視者だから観察処分者候補の名は覚えてる」

「そうか」

「ちなみにお前と根本は候補第二位だ」

「げっ!! マジかよ」

そりゃあ、色んなことしてるからね。



第十八話「俺とプールと水着の楽園（中編）（後書き）」

どうも、作者の米田です。

テスト週間で更新が出来ませんでした。

実は今度バカテスの夢小説をもう一つ、ISの夢小説を書き始めようと思います。バカテスの夢小説のタイトルは決定しています。

タイトルは、バカと幻夢と召喚獣です。

カップリングは、明久×瑞希。オリ×優子でいきます。

## 第十九話「俺とプールと水着の楽園」

蓮Side

悲劇の始まりは明久の言葉だった。

「お腹すいたね……」

「そつだな、もう昼か」

「どこかのコンビニで弁当でも買うか」

すると、姫路が……。

「それなら、私ワツフルを4個……」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最強王者決定戦っ！」（明久の声）

「ガチンコ、水泳対決！！」（明久と雄二の声）

「……イエーイ！！」（俺と秀吉とムッツリーニの合いの手）

姫路の台詞の途中に割り込む俺達の台詞。

「明久、ルール説明！！」

「オッケー、ルールは簡単このプールを往復して最初にゴールした

「ら勝ち!!」

要するに、最初にゴールしたら姫路の毒料理を食わなくてすむと言  
うことだ。

「……もしかして、蓮兄達瑞希が料理うまくなったの知らないのか  
な？」

「うん、そうだね」

うん？ 何だ？

「バカなお兄ちゃん達ガンバルです!!」

うん、葉月ちゃん純粹だね。

「面白そうだね。じゃあ、ボクが審判するね」

審判は工藤がするんだ。

俺と明久、雄二、ムツツリーニ、秀吉（何故かまだ女物の水着使用）  
が定位置に着いた。さて、どうなるやら。

「位置について、ヨーイ、スタート!!」

「くたばれええ!!」

行き成り明久と雄二が取っ組み合いを始めた。……ってなにやって  
んだよ!? あいつら？

まあ、取りあえず、今のウチに稼ぎますか。

そんなこんなで、残り20メートルくらいの所で、明久が秀吉の、雄二が俺の邪魔を……って!!

「なにすんじゃあ!!」

「取りあえず死ね!!」

俺と雄二の取っ組み合いが始まるうとしていた。だが、突如プールが赤く染まった。

「うん？　なんだこれ？」

赤い液体の原因を探っていると、ムツツリーニが大量の鼻血を出していた。

「……絵美里、これはどういう事？」

「さ、さあ」

「取りあえず……救急車呼ぶか……」

結局、ムツツリーニは何度も峠を越えたが、俺達と緊急隊員の応急処置で一命を取り留めた。

翌日。

「蓮、絵美里……」

「「はい？」」

俺達は祖母さんに呼ばれて学園長室にいる。

「プールが血まみれなのはどついつ事さね？」

「実は……」

事の経緯を説明した。

「……木下秀吉は合宿の時は風呂を別にした方が良さね」

「「そうですね……」」

俺達は賛同することしかできなかった。

## 第二十話「僕と脅迫状とヤンデレ？」

明久Side

僕は今日普段より早く学校に来た。そこで、ロッカーであるものを見つけた。それは……。

「これは……ら、ラブレター？」

だったら、やばい。瑞希に見つかったら……殺される。

「どうした、明久？」

ドキッ！！

「何だ。蓮と絵美里か……」

「本当にどうしたんだ？」

「吉井君、背中に隠しているのは何？もしかして、ラブレター？瑞希以外の子と付き合ったら……どうなるか分かる？」

「そ、そんな事無いよ。僕は瑞希一筋だ」

「そうならそれはなに？」

「さあ、開けてみようかな」

手紙を開けてみると中身は……。

『あなたの秘密を握っています』

脅迫状だった。

「最悪じゃあ——————!!!!!!!!!!」

「で、中身に学園祭で盗撮された、お前の女装写真があったんだ」

「そう」

これがばらまかれたら僕の人生が終わる。

「あれ、どうしたんですか明久君？」

「あ、瑞希」

「そうだ、瑞希は吉井君の女装写真があったらどうする？」

川上さん、君はなんてことを聞くんた。

「もし、そんな写真があったら……スキャナーを買いますね」

「えっ？ 何で？」

分からないな、何で？

「だって、その……、そうしないと明久君の魅力が世界に伝わらないのよ……」



瑞希Side

先程、明久君が脅迫されている事を川上君に聞いて驚きました。

「許しません……私の大事な、大事な明久君を脅迫するなんて許しませんよ……」

「最近、瑞希がヤンデレっぽくなってるよ」

## 第二十一話「俺と嫉妬と変化」

蓮Side

「あゝイライラする」

俺達は、今合宿所に行くのに電車に乗っているのだが……。

明久と姫路、秀吉と絵美里がいちゃついているのが少しむかついたからだ。

何故なら……優子がAクラスだから一緒に行けないからだ。

「はあ、暇だ」

「……（コクコク）」

そういえば……。

「そういえば、ムツツリーニお前は工藤と付き合っているのか？」

「……ああ」

「珍しく否定しないな……何か寂しいよな」

「……（コクコク）」

ああ、地獄だ。

「あんだ達はまだ良いわよ。ウチには恋人がいないのよ」

「ああ、そうだな」

そういえば、……。

「ムツツリーニ、一応これが容疑者リストだ」

「……照合してみる」

明久が盗撮されていると言うことで、俺は容疑者（盗撮の得意なやつ）をリストアップしていた。……まあ、だいたい誰だか分かっているけど……。

「そう言えば、お腹すいたね」

……おい、明久。お前死亡グラフたてなかったか？

明久Side

「あ、そろそろお昼ですね」

僕と瑞希はいちゃいちゃしていたけど、僕が言った言葉で僕は寒気がした。

「実は私、お弁当を……」

ま、不味いこのままだと僕の命が……。

「させないよ」

僕が出そうとしていたパンを川上さんが投げ飛ばした。

「ちょっと!!! 川上さん、君はなんてことを……」

「あの、明久君。駄目ですか」（涙目の上目遣い）

「う……」

……大切な恋人に涙目の上目遣いをされたら食べずにはいられない。

「おじいちゃん……今そつちに行くよ。いただきます」

そして、唐揚げを食べる僕。

モグモグ。あれ……？

「お、おいしい」

「良かった。実は土曜日絵美里ちゃん達と練習したので  
なるほど、それなら……。」

「じゃあ、もっと食べるね」

「はい ぶっぞ」

蓮 Side

「良かったな、姫路の料理がましになって……」

「……………（コクコク）」

それは良いんだけど……………。

「明久君、あ〜ん」

「あ〜ん」

あ〜んをしてるよ。ああ、甘ったるい。

「……………ブラックコーヒーを買いに行こう」

「……………砂糖を吐きそう」

「……………」

ちなみに島田が凄い殺気を出している。

……………所変わって合宿所……………

「で、俺達の調査から容疑者を、ムツツリーニの調査から容疑者の特徴が分かった」

「それで、その特徴は？」

「……………犯人は女子。お尻に火傷の後がある」

今、俺達は明久達に調査報告をしている。

「まあ、絵美里にそいつを捜して貰うように頼んだから後は……うん？」

「どっしたのじゃ？」 蓮

「……隠れる」

何かが来る。

第二十一話「俺と嫉妬と変化」(後書き)

いつの間にか三万PV超えていました。

驚きです。

## 第二十二話「侵入者とテレとお仕置き」

NOSide

バン！！

部屋のドアを開けて数人の女子が入ってきた。だが、部屋の中には誰もいなかった。

「あれ？ 誰もいない？」

「きっと、この部屋にいるはずよ。探しなさい」

そうして、襖の中を探そうとしたが……。

「お前ら何をしている……？」

女子は声の聞こえた方を見ると……。

「に、西村先生？」

「な、何故ここに？」

「それは」

「俺がこの部屋に侵入している君たちを見たから、西村先生を呼んだんだ」

鉄人の後ろからは蓮が出てきた。

「……まさか本当に男子の部屋を物色するやつがいるとは……」

「に、西村先生!! 誤解です」

「詳しい話しは指導室で聞く」

「「「イヤアアアアアアアアア!!!!!!」」」

連れていかれる女子達。

蓮Side

「やっぱりそう来たか」

「助かったね」

俺が気づかなかったらどうなっていたか。

うん、雄二はムツツリー二と覗きにいったよ。

「そういえば、蓮はともかく、秀吉は覗きに参加しないの?」

「明久……ワシが覗きをしたら絵美里に殺されるのじゃ……」

「確かに……」

俺達が覗きに行けば……自分の彼女に殺される。

「うん、秀吉君は自分の立場が分かってるね」

「え、絵美里？」

優子と絵美里、姫路が部屋に入ってきた。

「蓮兄の部屋に女子が侵入したって言うから心配で来たの」

「そうか」

「ところで、蓮」

「何だ優子？」

「吉井君は何をしているの？」

優子は真面目に勉強している明久を指さした。

「明久は勉強しているぞ」

「なんか勉強しているイメージ無いんだけど」

「来年も姫路と同じクラスになりたいから勉強しているそうだ」

そして、姫路は顔を真っ赤に染めて俯く。

「でも、Aクラスに入るのは無理じゃない？」

「これを見ってみろ」

俺は明久が解き終わった問題集を渡した。

「ぜ、全問正解」

「凄い集中力だろ？」

俺もそう思った。ここまで集中力があると思っていなかった。

「これならAクラスに入れると思うな」

「そうね、……蓮」

「何だ？」

「来年はAクラスに入れるよね？」

「ああ、たぶん」

どうしたんだ？

「よかった、その蓮と一緒に合宿に行けないのが、その……寂しくて」

……優子が顔を赤くして俯いてるのが可愛かった。

「……優子」

「な、何？ 蓮？ つー！」

俺は優子にキスをした。

「れ、蓮？ ひゃああ」

そして、ディープキスまでした。

「れ、蓮兄！！ 何をしてるの！？」

「いや、最近イチャイチャ出来てないからつい……………」

「か、川上君、行き成りそんな事しちゃ駄目ですよ。優子ちゃんがトリップしてますよ！？」

「ああ、すまない……………」

「……………幸せ……………」

「優ちゃん戻ってきて！！」

……………少しして優子は戻ってきた。

「ねえ、秀吉君」

「なんじゃ、絵美里？」

「私もキスしたいな……………」

「ど、どうしてじゃ？」

「何となく？」

「何となくって……………」



## 第二三話「敵襲？」

蓮Side

「……雄二一緒に勉強できてうれしい」

「待て翔子、当たり前のように俺の膝の上に座るな。Fクラスの連中が俺の命を狙っている」

おいおい、雄二さんよう、これ位大目に見てやれよ。

今、俺達はAクラスメンバーと一緒に自習をしている。だから優子と一緒に入れるから凄く嬉しいぜ！！

「姫路さんここは？」

「そこはこつやってですね」

明久も真面目に勉強している。ここで問題なのが……。

『『『リア充は爆発しろ！！』』』

「ご存じ異端審問会のメンバー」。

「ったく、静かにしろよ。只でさえ翔子達のせいで寝不足なのに」

「自業自得だろ？」

あいつらが覗きなんかするからだ。

「あーやっと思つけたよムツツリー二君」

「フルフル  
……愛子」

ムツツリー二が恐怖で震えてる。

「昨日のお仕置きの続きをしようかなと」

怖いね。

「まったく、勉強をやるかやらないかは人それぞれじゃろ」

「秀吉君には来年Aクラスに入ってもらはないと」

「それはそうだね」

秀吉が来年もFクラスなら俺もFクラスだ。絵美里が秀吉と同じクラスが良いと言うからだ。俺は優子と同じクラスがいいからな。

「？ 工藤来ておつたのか？」

「うん、そういえばこれ知ってるかな？」

工藤は録音機みたいな物を取り出した。あれって確か脅迫犯と一緒にのやつなんだ。

「最近これにはまってるんだよね」

「何故、わし』やらないか』』工藤』待つのじゃー！！ これはわし

の言葉じゃ」

「秀吉君……、オシオキダヨ」

絵美里は何処からか大きな斧を出した。

「待つんじゃない絵美里そんな巨大な斧どこから……ギャアアアアアアアア！！！」

秀吉の冥福を心からお祈りします。

夕方

「酷い目に遭ったのじゃ」

「大丈夫か？」

自主勉強が終わり、夕飯を食べた後に俺達は部屋に戻ってきていた。

「え〜と3だな」

何故か優子達が俺達の部屋に来ていてダウトをしている。

雄二達？ あいつらはFクラスの連中達を敲きだして覗きにいったよ。

「全く懲りないよね〜、力の差が分かっているのにね〜4」

「5です。高橋先生は強いですからね」

「6よ」

「ダウトだ。優子」

優子が嘘を吐くのがバレバレだからね。

「ううう」

「何故ワシは勉強をさせられているのじゃ？」

「言っただろ、お前にAクラスに入って貰わないと俺が困るんだ」

「じゃが」

「明久を見る。姫路と一緒にのクラスになるためガンバっているぞ」

「愛の力って凄いわね」

俺もそう思うな。

「じゃあ、ダウトの続きを」

「あんだ達手を挙げなさい！！」

また昨日の女子が来たな。

「なんだよお前ら」

来たのはCクラス代表の小山だ。

「アンタのせいでアタシ達が、男子の下着ドロボー扱いされたじゃない」

「そうですかー」

「無視するな！ー！」

「フだね」

「いい加減にしないでよ！！ 遠藤先生Cクラスの小山が英語で勝負を申し込めます。試験召喚」

「「「試験召喚」」」

「面倒くせえな、試験召喚」

Cクラス 小山 友香 英語 165点

モブキャラ 英語 平均145点

Fクラス 川上 蓮 英語 998点

「「「900点越え！？」」」

「補習室に行きやがれ」

一瞬で相手の召喚獣を倒してしまった。

「戦死者は補習！ー！」

「「「何で西村先生がいるんですか？ イヤアアアアアアア！」」」

何故かいる西村先生が女子達を補習室に連れていった。

「雄二達はどつしたんだろっ？」

「たぶん捕まったな」

「そっだね」

……補習室……

「……雄二は学習しない」

「懲りないねえ〜ムツツリーニ君」

「「ギヤアアアアアア！」」

自業自得だな。

第三話「敵襲？」（後書き）

最近、雄二とムツツリーニが落ちになってる気がする。

## 第二四話「敵襲その2」

蓮Side

朝も色々あつて俺は夜も部屋に戻っている。

「で、何でまたお前らがいるんだ？」

昨日のように姫路と優子が部屋に来ている。

「何となくです」「

「何となくか……」

ちなみに絵美里はある報告書を書いて貰っている。

「本当に吉井君の集中力凄いわよね。秀吉も見習って欲しいわ」

「放っておいて欲しいのじゃ……」

確かに明久の集中力は凄い、先程文月学園のテストを受けさせたところ……もうAクラスレベルになってる。

「さてと、またダウトでもするか？」

昨日の続きでダウトをしようと思ったが……、またあいつらが来た。

「か・わ・か・み……」

「うん？ 何だ昨日のCクラスどもか。何か用か？」

本当にうんざりするほどしつこいな。

「あれ、自分たちだけだと勝てないからってDクラスとEクラスも呼んできたのか？」

「うるさいわよ！！」

まったく、数がいれば勝てるわけじゃないだろ。

「西村先生！！ Cクラス女子、Dクラス女子、Eクラス女子が古典で川上蓮に勝負を申し込みます。試験召喚<sup>サモン</sup>」

古典 Cクラス女子モブ平均点 140点

Dクラス女子モブ平均 105点

Eクラス女子モブ平均 75点

Fクラス 川上蓮 850点

『『『高っ！！』』』』

「帰国子女だからって古典が苦手な訳じゃないぞ」

まったく、弱すぎるね。

結果はあっさり決まった。

「じゃあ、補習室にいつてらっしゃーい」

『『『いやあああああああああ！』』』』

「……本当に吉井も不参加だったな」

意外そうな顔をして西村先生は帰っていった。

……数十分後……

「酷い目に遭ったな」

「今日は普段より早いな」

姫路達が帰ってしばらくすると雄二達が帰ってきた。

「ああ、何故か翔子達が早く解放してくれたんだ」

「さいですか」

「とじろで……」

「断る」

「何も言っていないが……」

「どうせ優子や姫路達を呼んで写真を撮ってヤロー共の士気を上げようって作戦だろ？」

だいたい予想が出来るんだよね。

「駄目か？」

「「駄目だ!!」」

「即答かよ……」

自分の彼女の写真を撮らせるバカはいないだろう。

「一応呼ぶか……」

十分後。

「「お邪魔します」」

「秀吉君、来たよ」

来るの早いな。

「絵美里、あれは終わったのか？」

「うん、もちろん」

「じゃあ明日現行犯で捕まえるぞ」

「了解」

これですべてが終わる。

「そういえば瑞希、霧島さんと工藤さんは？」

「ええと、誘ったのですが2人とも色々な準備があるそうなので来ません」

「そうなんだ」

何かつまらないね。色々からかおうと思ったのに。

「ところで、お前らにこれをプレゼントだ」

「……坂本君、これって備え付けの浴衣よね？」

「そうだ、お前達……」

雄二が一端言葉を切る。

「恋人とのツーショット写真は欲しくないか？」

「……詳しく聞かせてください」「」

簡単に釣られたな。

この後、俺と明久、秀吉も着替えて撮影が始まった。……ムツツリ  
一二が死にかけたど大丈夫だよな。

これで今日も終わるかと思ったが違った。



## 第二四話「敵襲その2」(後書き)

今回、更新するのに時間が掛かりました。

次回はそのパニックを書くつもりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4694t/>

---

バカとテストと監視者

2012年1月7日20時49分発行